

「災害のあと 震災のまえ」
その5

當眞嗣朗

「災害のあと　震災のまえ」

その5

それは粘着性を帯びたジエル状の液体だった。白濁してい

て、どうやら内部には芯のようなものがあるらしく、それは

ヒトの形をしているようだつた。つまり胴体があり、そこに

頭部や手足がついているということだ。時折、その液体が盛

りあがり（あるいは身体を起こし）、その姿かたちを現すの

で、からうじてそれが人間の形をしていることが判つた。そ

してノボルがそれを人間だと認識した理由は、そこに紛れも

ない人間の顔があるからだつた。目や鼻があり、口がついて

いるのだ。もちろん猿の類いにも同じように、人間に近しい

顔がある。しかしなおノボルは、そこにはつきりと、類人猿のな

かでは人類でしか持ち得ないだろう高度な知性を感じたの

だつた。彼は束の間の動搖と逡巡の後で悟つた。彼らは（恐

らくは）身体が溶ける病を負つてゐるのだ。

「お前の考へてゐることは判る。本来、人間はこのような姿をしていないからな。しかし彼らは、ある病に冒されている

「このヒトたちは一体どうしてこうなつたの？」見えない何かで塞がれていた喉が、ようやく解放されて自由を得た。ノボルは声を身体の底から必死で持ちあげた。声音は動搖を示して震え、掠れていた。そこには恐怖が濃厚に含まれていた。

「これが人類の辿り着いた末路だ」。学者が深い絶望と怒りをあらわした声で言つた。

「優れた技術を持ち、高度な文明を築きあげた人類は、社会を円滑に動かすために貨幣社会を生み出した。それはやがて市場原理という概念を生み出し、人類は金以外のものに価値を見出さなくなつた。その結果、病に倒れる人間が現われるようになつた」

「判らないな」。ノボルは多分の苛立ちを込めて言つた。

「それが何故、こんな事態を生むというの？」

「もちろん彼らは俺たちと同じ人間だ」。ツネコ姉さんが諭すように言葉を添えた。

んだ」

「病?」。ノボルは乏しい知識を総動員して、人間が患う病の例を脳裏にめぐらせた。それは單なる風邪から死を迫られる癌に至るまで、乏しいなりにも多岐にわたった。しかし今、彼が直面している現実に符合する病の症例は、残念ながらひとつとして思い浮かばなかつた。

「彼らは身体が腐食するんだよ」

と、学者が言つた。重い決断を迫られた人間が発する厳しい声音だった。

「産まれたときは我々と変わらない姿をしている。皮膚は弾力を持ち防水性に富み、人体という小さな世界をしつかりと包み込んでいる。彼らは人間として、ある一時期まで、通常と変わらない生活を送っている。しかし彼らの身体には伝子という爆弾が、あらかじめセットされている。それが長い眠りから覚め、活動をはじめる頃になると、状況は一変する。最初は風邪のような症状を示す。高熱が出て、全身を倦怠感が包み、鼻水が止まらない。やがて彼らの皮膚には無数

い眠りから覚め、活動をはじめる頃になると、状況は一変す

感情が複雑な動きで胸の内側を躍動する。その不思議な感触に、ノボルは激しく動搖した。そこには涙をともなう悲し

の水泡があらわれる。丁度、誰もが幼少時に経験する水疱瘡に似ている。しかしそれは風邪でも水疱瘡でもない。水泡が消えることなく増殖する。医者はその原因を掴むことができない。そしてある一定の段階に達すると、その水泡は自然に破れはじめる。内部から白濁した液体が飛び出す。実はそれが身体を溶かす特殊な酸なんだよ。水泡は絶えることなく増殖を続け、その都度、古い水泡は破れていく。彼らは成長するごとに身体が腐敗して溶けていく。そういう病なんだよ。十歳を迎える頃にはもう自力で立つことができなくなる。原因が判らないから治療の仕様もなくてね、その酸は他人の身体にも悪影響を与えるから隔離するしかない。この悪夢のような現実に旧世界の政府は救済策を講じることに決めたんだが、結局は人里離れた場所へと隔離することにしたんだ。それはかつてのハンセン病患者にたいする措置と同様だった。悲しいことだよ」

さと空しさがあり、そして憤りと憎しみが同等の分量で同居

していた。しかしそれらの感情はどれも名づけようがなく漠然としていた。すべての感情に芯はあつた。しかしそれは粘着性を帯びた膜に包まれて一体となっていた。まるで、目の前にいる病を負つた人々のように。そしてそれは必要以上に自己を主張しなかつた。今し方受けた衝撃が彼らを抑え込み、からうじて精神の安定を保つているのだ。それがなければ彼は、衝撃の大きさのあまり大声で泣き叫んでいたかもしれない。

「もう一度言うが、残念ながらこれは治療することが出来ない種類の病だ。現在の人類の医療技術では不可能なんだ。身体が腐敗するメカニズムさえ解明されていない」

学者の言葉に、ノボルは身体が震えるのを感じた。

「どうしてこんなことになつたの？ 隔離するにしたつて、どうして洞窟のなかに」

ノボルの問いかけに学者が答えを返した。その声は異様に平坦な響き方をした。事実のみが力を持つこの現実世界で感

情の無力を真摯に見つめる人物の声だった。

「今から三十年程前の話だ。その当時、世界は災害など知らず、平穏で豊かさの頂点を極めていた。食べ物は有り余るほどあり、人々は飢えを忘れた。もちろん第三世界での飢餓は深刻だつたし、先進国による彼らからの搾取は甚大な問題を孕んでいた。しかし飢えを忘れた人々は遠くを見ないものだ。いかに異国之地で大勢の人間が苦しんでいようと、この豊かな世界には関係のないことだった。彼らは自国内の問題、例えば雇用や福祉など、そういった自分の生活に直接関わる問題でない限り、関心の目を向けようとしなかつたんだ」

ところで、と学者が傍らのノボルに訊いた。「ひとつこの國家を滅ぼそうとするには、どうしたらいいと思う？」ノボルは考えて、「武力を用いた外交」と簡潔に答えた。乏しい知識のなかで満足のいく回答だった。学者は、なるほど、と軽く頷いて、それでは国は滅びない、この高度に洗練された国際社会では戦争では国家を滅ぼすことはできないんだよ、互いに武力という外交上のカードを見せ合つて、平穏という

保障を得、経済を安定させることで世界は成り立っているからだ、武力で崩壊する国家は大抵、別の原因がある、と言つた。では、答えはなにか？ 学者はひとつ重苦しいため息を吐き出し、喉の奥から声を押し出すようにして言つた。

「それは国民の目を塞ぐことだよ」

「目を塞ぐ？ どういうこと？」。ノボルは訊いた。

「正確に言えば、国民に遠い異国の現状を考えさせないことで。つまり遠くを見せないことだよ。旧世界の人間はね、まつたく遠くを見ようとしなかった。異国の紛争や飢餓、先進国の搾取や差別。それらの暗い現実を知ろうとしなかった。彼らが望んでいたのは、生活の安定、豊かさの確保、それだけだ。その豊かで安定した生活が何を犠牲にしたうえで成立しているのか、彼らはまるで知らなかつた。国内で消費される食料の大半を外国からの輸入に頼り、自国では生産せず、製造業の多くは国内での製造を止めて、人件費の安い海外の工場に仕事を発注していた。現代人が生活する上で重要な問題であるエネルギーの確保手段は、国内の政治的に立場の弱

い一地域に金をばらまき犠牲を押し付けることで賄つた。それは防衛に於いても同様だつた。そのうえで人々は平和を享受し、日々の生活を平穏に過ごすことができたのだ」

でも、とノボルが口を挟んだ。

「どんな人間にも平穏な生活を享受する権利はあるでしょう？」

「もちろんだよ」。学者はその問い合わせ強く顎を引くことで答えた。「どんな人間にも平穏な生活を享受する権利がある。それは如何なる理由をもつてしても侵してはいけない権利だ。それは間違いない。しかし問題なのは——」。学者は吐き出す声を、見えないナイフで削り取るようにして、尖らせた。

「その平穏な生活が遠く離れた世界の人間の不幸によつて忘れていたというよりは、初めからその事実を知らず、関心さえ示そうとはしなかつたと言つたほうがいいだろう。彼らはまるで無邪気な子供のような白痴振りを示して、日々、大

量の食品を廃棄し、電気を浪費し、平和な時間を無駄に費やした。それが遠い世界の人々を不幸にすることで生み出された產物だというのに、だ。わたしはそこに激しい憤りの念を覚える」

その狂乱に満ちた世界を具体的に想像することが、災害の後に生まれたノボルには、ひどく困難だった。想像力は力を持たず、薄い現実と過去の膜を空しく擦り抜けた。それらを補強する知識は薄弱で、事実を射抜くには深い洞察力に欠けていた。彼にとって過去の楽園は、確固とした具象性を伴わない頼りないイメージの存在だった。

災害の後、世界は一変したという。それまでの豊かさと平穀さは、薄皮を剥ぎ取られたかのように失われ、混乱があらわになつた。そして人々は、生活の利便性をはるかに後退させることによって安定を得た。その営みには当然のことながら、かつてのようない勢いはない。

ノボルは暗い夜が遠ざけられた世界を知らない。食べ物に

溢れ、日々、大量の食品が売買され、廃棄されていた時代を知らない。今では一人の人間が使用できるエネルギーの総量は制限されていたし、それも再生可能自然エネルギーに限られていた。そして治安は劇的に悪化し、自動小銃で武装して外出しなければならないほど、世界は危険を抱えていた。

豊かで平穀な世界。それはツネコ姉さんが時折、ノボルに語って聞かせる物語に過ぎないものだつた。それは常に彼を取り巻く現実を上滑りし、しつかりと捉えられるものではなかつた。だからノボルは、学者の言葉を非現実的な空想話としてしか受け取ることができなかつた。別の惑星に住む生き物の人類とは懸け離れた営みのようにしか聞けなかつた。しかしそれは紛れもなく、災害が発生する以前のこの国に住まう人間の姿なのだ。

学者は淡々とした口調で言葉を重ね続けた。

「それは豊かさに溢れた社会が到達した、最高度の成熟だと言つてもいいだろう。その言葉には深い教養があり、鋭い知見が備わっているように感じられる。しかし現実はどうだつ

ただどうか？それは必ずしも不特定多数の善意の人々の

期待に沿うものではなかつたようと思われる。では何故、そ

れが成熟なのか？当然キミは疑問を持つだろ。なにしろ

旧世界の人間は自己を取り巻く厳しい現実を知らず、知る努力さえせず、夢の世界に閉じこもつていたのだからね。しかし過酷な飢えを知らず、他国の脅威にもさらされず、豊かさ

だけを確立した社会だけが到達できる高みというものは確かにあるんだよ。それは何か？それは旧世界で唯一、国際競争力を持つことに成功した文化産業、クール・ジャパンなんだ

「クール・ジャパン？」ノボルはその言葉を知っていた。

何故ならそれが、かつてツネコ姉さんの心象世界を支えていた文化産業のひとつだったからだ。彼女が歌手をやっていた時代、彼女の歌は、それらの世界觀を支えるコンテンツとして大量に消費されていたのだ。そしてその平和の国で生まれた奇跡のような文化産業は、世界中のを魅了したという。

そのクール・ジャパンが、どうしたというのだろう？彼は

学者の次なる言葉を待つた。

学者が断定的な強い口調で言った。

「日本のサブカルチャーが世界に多大なる影響を与えた結果、世界は狭小化した。遠い異国で何が起きているのか、まるで知ろうとしない人間が増えたんだ。つまり遠くを見ない人間が増殖することになったんだ」

「遠くを見ない」。ノボルはその平坦で奥行きを欠いた言葉を繰り返した。そこには手応えを感じさせる何かが欠乏していた。薄く引き伸ばされ色合いを失った色素のようだ。いくら色を塗り重ねても、そこは透明さだけで厚みを増した強度不足の膜でしかない。彼は、ただ戸惑うばかりだった。その言葉の意味をうまく掴むことができなかつたのだ。

そんなノボルを冷ややかな眼差しで一瞥した後、学者はそのままの瞳を遠くへと向けた。彼は語つた。

「戦争や飢餓、搾取や差別はクール・ジャパンの恰好の材料だった。日本の最先端の文化産業に触発されて世界中のクリエイターたちがそれらを進んで消費しつづけた結果、ある商品が開発されたんだ。それを米国のある農薬を製造する会社

がやつたんだ」

「その会社の商品開発部門に勤めていたその社員は熱烈なアニメ信者だった。彼は日本のマンガやアニメの情報に随分な博識振りを示して、定期的に休暇を取つては日本を訪れ、東京のアニメ専門店をまわり、コミックマーケット等にも足

が国民意識に大きな影響を与え、それが決して歓迎できないレベルに達していることを指摘していたからだ。例えば彼は、絶えることのない自国の戦争は、軍産複合体のみがその要因となつてゐるわけではないことを鋭く指摘していた。それは英雄を好むアメリカ人の不幸な病である、と」

繁く通つたんだ。彼の自宅の書斎にはアニメ関連のフィギュアが多数並び、マンガやDVD等も相当数コレクションしていた。彼にとってアニメは現実の延長線上にあるもので、そこで描かれる巨大ロボット同士の戦争等は、戦争を知らない彼に、ヒトが争うことの無益さと空しさを感じさせたんだ。親はそんな彼のことを必ずしも快く思つていたわけではない。決して頭は悪くないのだが、妄想の世界に生きる傾向があり、現実の厳しい側面を詳しく知らない、と考えていた。それは人間的な深みの欠如を如実に示すものだった。彼の親は息子の趣味嗜好にたいして厳しく指導、介入しなかつたが、それでも彼の将来を考え、若干憂鬱な気持ちになつてゐた。その頃、アメリカの有名な精神分析医が、文化的コンテンツ

「その時点では退役していたものの、かつては軍人だった彼の父親は、息子に、自らが従軍したベトナム戦争について詳細に語つた。そうすることで彼に現実の暗い側面を直視させようとしたのだ。それらの話は詳細に語れば語るほど、悲劇的な側面だけが強調された。まるで不幸を生み出すメリーゴーラウンドのようだ、と彼の父親は思つた。幸福の追求を目的に回りだすが、その回転運動は結果として不幸しか生み出さないのだ。戦時下に於いて、ひとりの国民が国家という巨大な権力にたいしていかに無力であるか、そして戦場でどのようにして死んでいくのか、幸運にも生還できた若い兵士たちがいかに精神的な苦痛を背負うことになるのか。詳細に語るたびに彼の父親は口が重くなるのを感じて、陰鬱な気持

ちになつた。しかし彼の息子は、憂いに満ちた瞳で、一言、こう言うのだった。『パパ、ヒトが争うつてのは、なんて空しいんだろう』と。その時、父親は違和感を覚えて、息子の目を見るんだよ。そしてその瞳に、現実が一欠けらも映りこんでいないのを確認して愕然とするんだ』

「そんなある日、会社は彼に新製品の開発を命令したんだ。その頃、アメリカの農業は、ある深刻な問題を抱えていた。日本の福島で二〇一一年に起きた原発事故の後、植物に異変が生じていたんだ。それはあらゆる条件に耐性を示す強力な生命力を持つ植物の登場だった。それはどこにでも自生しているセンダン草の変種だった。それが異常なまでに繁殖し、あらゆる除草剤に対しても耐性を示していた。それが農家の生産率を著しく低下させていたんだ。もちろんそれは放射能の影響だった。彼の勤める会社は彼に、その植物に効果のある除草剤の開発を命じたんだ。しかし、それが——」

その時、学者の言葉を途中で遮るように甲高い銃声が響き

渡つた。それは密閉された狭い室内に衝撃的な強さで反響し、滯留する空気を厳しく殴りつけた。まるで何者かがあらかじめ仕掛けた爆発物によつて空気が粉々に破壊され、それが重みのある石の飛礫となつて激しく降り注いでくるような感じだつた。

不意の発砲音に驚いて身体を萎縮させたノボルは、身体に食らいつく銃声の熱を感じながら、その場に呆然と佇んでいた。まるで身体の主導権を根こそぎ別の何かに奪われたかのようだ。一体何が生じて、世界は活動を止めてしまつたのだろうか？ 衝撃によつて思考の大半を弾き飛ばされた彼は、事態を把握するべく残された思考を総動員して働かせて、状況を正確に掴もうとした。

そしてノボルは見た。学者が膝を折つてその場に力なく座り込み、短い呻き声をあげた後、激しく吐血して、前のめりの姿勢で倒れたのだ。まるで落雷の一撃を受けて意識を失い、全身の筋肉を制御出来なくなつた人間のような動きだ。その先には白濁した粘液に全身を包まれた病を患つた人々がいて、その只中に彼は沈んだのだ。慌てて彼を助けようとした

ノボルは、まるで学者が、自ら進んでその粘液のなかに倒れこんでいったような錯覚を覚えて、混乱した。

彼女が撃ったのだ。

背中に不意の銃撃を受けた学者は、今では白濁した粘液の溜まりのなかにその半身を沈めていた。血痕のひろがるその背中は苦痛を示して微かな痙攣を繰り返した。その様子は水揚げされた魚がそれでも海中へと自己の居場所を求めてもがいているように見えた。しかし実際には、混乱が唐突に地下の水脈から噴き出したようにしか、ノボルの目には映つていなかつた。それはただの混乱でしかなかつたのだ。

彼は、学者を救助するべく咄嗟に反応し、足場の上から粘液のなかへと足を踏み出そうとした。その動きを怒声が制した。「行くなッ！」。ツネコ姉さんだつた。ノボルは驚いて半身を捻り、背後に立つ姉に視線を注いだ。そして息を呑んだ。衝撃が彼を乱暴に殴りつけた。姉が自動小銃を構え、引き金に指をかけていたのだ。その銃口は、今し方、学者が立つていた方向へと冷たく向けられていた。弟は一瞬で状況を察した。